

# 「鼻」を茹でる

——今昔物語と芥川龍之介——

永井和子

芥川龍之介の短篇小説「鼻」は、今昔物語、或は宇治拾遺物語の話に拠っていることはよく知られている。このことは作者が新思潮に発表の折、末尾に

禅智内供は、禅珍内供とも云はれてゐる、出所は今昔（宇治拾遺にもある）である、しかしこの小説の中にある事実がそのまゝ出てゐるわけではない。

と注していることから明かであるが、それと同時に「そのまゝ出てゐるわけではない」という通り、両者を仔細にのみくらべてみるとあたかも原文にかなり忠実に従つたと思われる部分にさえ、芥川らしい精緻な工夫が凝らされているさまを読みとることができ、ここではその一つの例として「鼻」の主人公禅智内供が、鼻を短くするために用いた「ゆでる」という方法を中心として、その言葉の意味するところを「鼻」における表現の側と、今昔物語等における意味、用法の両面から考えてみたいと思う。

「鼻」全体の筋については省略するが、ここで問題とする部分は、

長い鼻に悩む禅智内供が京の医者から教わってきた鼻を短くする法をいよいよ実践するくだりで、今昔物語の表現を大方借り用いて効果的な描写をしている箇所である。

その法と云ふのは、唯、湯で鼻を茹で、その鼻を人に踏ませると云ふ、極めて簡単なものであった。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしてゐる。そこで弟子の僧は、指も入れられないやうな熱い湯を、すぐに提ひきあげに入れて、湯屋から汲んで来た。しかしちかかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷する惧がある。そこで折敷おしきへ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云つた。

——もう大分茹なつた時分でござらう。

内供は苦笑した、これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだらうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤のくふやうにむづ痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気

の立つてゐる鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になって、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見てゐるのである。弟子の僧は、時々気の毒さうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を云った。

—痛うはござらぬかな。医師は責めて踏めと申したで。ぢやが、痛うはござらぬかな。

内供は、首を振って、痛くないと云ふ意味を示さうとした。所が鼻を踏まれてゐるので思ふやうに首が動かない。そこで、上眼を使って、弟子の僧の足に輝のきれてゐるのを見ながら、腹を立てたやうな声で、

—痛うはないて。

と答へた。實際はむづ痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て気もちのいゝ位だったのである。

しばらく踏んでゐると、やがて、粟粒のやうなものが、鼻へ出来はじめた。云はゞ毛をむしつた小鳥をそっくり丸炙にしたやうな形である。弟子の僧は、之を見ると、足を止めて独り言のやうにかう言つた。

—之を鑷子でぬけと申す事でござつた。

内供は不足らしく頬をふくらせて、黙つて弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のやうに取扱ふのが、不愉快に思はれたからである。内供は信用しない医者の手術をうける患者のやうな顔をして不承不承に弟子の僧が鼻の毛穴から鑷子で脂をとるのを眺めてゐた。脂は鳥の羽の茎のやう

な形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがて之が一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたやうな顔をして、

—もう一度、之を茹でればようござる。

と言つた。

内供は矢張、八の字のよせたまゝ、不服らしい顔をして弟子の僧の言ふなりになつてゐた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、何時になく短くなつてゐる。これではあたりまへの鍵鼻と大した変りはない。内供はその短くなつた鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極りが悪るさうにおつおつ覗いて見た。(第四次「新思潮」創刊号〔大正五年二月〕所載の本文による。以下同じ。傍点筆者。なおこの本文は、後の単行本所収のものとは少異がある)

右の部分は、今昔物語巻第二十八、「池尾禪碑内供鼻語 第二」に次のような記載があるのに該当する。

然テ、此ノ内供ハ、鼻ノ長カリケル、五六寸許也ケレバ、頷ヨリモ下テナム見エケリ。色ハ赤ク紫色ニシテ、大柑子ノ皮ノ様ニシテ、ツブ立テゾ黻タリケル。其レガ極ク痒カリケル事无限シ。然レバ提ニ湯ヲ熱ク涌シテ、折敷ヲ其ノ鼻通ル許ニ置テ、火ノ氣ニ面ノ熱ク泡ラルレバ、其ノ折敷ノ穴ニ鼻ヲ指シ通シテ、其ノ提ニ指入レテゾ茹ル、吉ク茹テ引出タレバ、色ハ紫色ニ成タルヲ、喬様ニ臥シテ、鼻ノ下ニ物ヲカヒテ、人ヲ以テ踏マスレバ、黒クツブ立タル穴毎ニ、煙ノ様ナル物出ヅ。其レヲ責テ踏メバ、白キ小虫ノ穴毎ニ指出タルヲ、鑷子ヲ以テ抜ケ

バ、四分許ノ白キ虫ヲ穴毎ヨリゾ拔出ケル。其ノ跡ハ穴ニテ開  
テナム見エケル。其レヲ亦同ジ湯ニ指入レテサラメキ、湯ニ初  
ノ如ク茹レバ、鼻糸小サク萎ミ、腋、テ、例ノ人ノ小キ鼻ニ成ヌ。  
亦二三日ニ成ヌレバ、痒リテ賦延テ、本ノ如クニ腫テ、大キニ  
成ヌ。如此クニシツ、腫タル日員ハ多クゾ有ケル。(岩波日  
本古典文学大系二六、今昔物語集五、八五ノ八六ページ。以下  
引用は同書による。)

又、宇治拾遺物語二五「鼻長僧の事 卷二ノ七」によって示せば次  
の如くである。

さて此内供は、鼻長かりけり。五六寸ばかりなりければ、お  
とがひよりさがりてぞ見えける。色は赤紫にて、大柑子のはだ  
のやうに、つぶだちてふくれたり。かゆがることかぎりなし。  
提に湯をかへらかして、折敷を鼻さしいるばかり舂り通して、  
火のほのほの顔にあたらぬやうにして、其折敷の穴より鼻をさ  
し出て、提の湯にさしいれて、よくくゆでて引あげたれば、  
色はこき紫色なり。それを、そばさまに臥て、したに物をあて  
て、人にふますれば、つぶだちたる孔ごとに、煙のやうなる物  
いづ。それをいたくふめば、しろき蟲の穴ごとに指いづるを、  
毛ぬきにてぬけば、四分ばかりなる白き蟲を、孔ごとにとりい  
だす。其あととは、孔だにあきて見ゆ。それを、又おなじ湯にい  
れて、さらめかしわかすに、ゆづれば鼻ちひさくしほみあがり  
て、たゞの人の鼻のやうになりぬ。又二三日になれば、さきの  
ごとくに、大きになりぬ。(岩波日本古典文学大系本九八ノ九  
九ページ。以下引用は同書による。)

「鼻をゆでる」とは何とも奇抜な着想であり、表現ではないか。し

かし言葉そのものは、もとなつた今昔物語の本文に三例、宇治拾  
遺物語の本文に二例見える「ゆづ」をそのまま借り用いたものであ  
る。ところでこの今昔等の「ゆづ」は、「鼻」におけるおもしろさ  
と全く等質の、奇抜な表現であつたらうか。結論を先に述べれば、  
今昔物語等で用いられた「ゆづ」という言葉は、限られた時代の限  
られた意味を持つ特殊な語であつたが、芥川はそれが現代語で一般  
的な意味しか持っていないのを知りつつあえてそのまゝ用いて、効  
果あらしめたのではないかと私は推定している。従つてこの「ゆ  
でる(ゆづ)」という語の意味から、まず考えてみることにしよう。

## 二

「ゆでる」とは、湯などに「何物か」を入れて熱を加え、変化せし  
める、といったようなことであろうが、現在の我々にとつて、多く  
の場合その「何物か」とは「食物」であり、調理の一法である。こ  
の一般的用法は平安時代から現代まで変りはなく、新撰字鏡に

爇 以菜入涌湯日燂煮也 奈由豆

とあるように、野菜類を「ゆでる(ゆづ)」というのは今日普通の  
用法であり、用例も多い。又催馬楽、大芹の

大芹は 國の禁物 小芹こそ ゆでても旨し これやこの せ

んばん さんの木 柞の木 盤 むしかめの筒  
も同様である。そのほか観智院本名義抄の

脯 ヌテシシ イリシシ

十卷本和名抄の

茹 文選伝玄詩云厨人進菹茹有酒不盈杯 《茹音人恕反 由、天毛、  
乃菹音霍菜菹也》

なども「ゆでしし」「ゆでもの」として理解することができる。

ところで一方、今昔物語に見るように、「ゆでる」対象が「食物」以外のものであることがある。そしてそれは「人体」に限定される。こうした例をさがしてみると管見に入った用例でみる限りでは、どうも平安時代の後期から末期の作品に集中してあらわれる特殊な用法のようである。(なお今昔物語集については巻一、三、五、七、九、十一、十二、十三、十五、十七、二十、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一巻の範囲であることをお断りしておく。)

「ゆづ」の対象は「人体」であり、そして、更にその目的といえは、病氣・けがなどの治療に限定されると思われる。これは、現在の古語辞典類にも大むね採用されている語義であり、例えば上田万年・松井簡治氏の「大日本国語辞典」の、「ゆづ」の項における、語の意味の部分のみをあげれば、

一、野菜などを、熱湯に入れて暫し煮る。うでる。

二、患部を湯にひたし、又は湯氣にて蒸す。たでる。湯治す。のように見えており、この二義を並記するのは他の辞典類も凡そ共通のことである。極めて例がすくないのであるが、以下食物以外に用いた例をあげてこのことを例証してみよう。

例1 (『榮花物語卷第十六、もとのしづく』寛仁三年四月ばかりに、堀河の女御明暮涙に沈みて在しませばにや、御心地も浮き、熱うもおぼされて、例ならぬ様にてあり過させ給程に、いと惱しうおぼされければ、「御風にや」とて、茹でさせ給ひて上らせ給ふに、御口鼻より血あえて、やがて消え入り給ひぬ。(岩波日本文学大系本、下、二五ページ。以下引用は同書による)

堀河女御延子が「風」の治療に用いた例である。頭注に「入浴してからだを温めなさつてのぼせあがられた折に」とあり、大むね従いたいのが、こまかい語義については後に改めて考えることとする。榮花物語にはまた「ゆで」という名詞の形で三例ほど見える。いずれも同じく「風」の治療に用いたものである。なおこれについても後述するが、榮花物語には「風」の描写が極めて多く、具体的な治療法の記述も精細である。

例2 (『榮花物語卷第一、月の宴』かゝる程に、九条殿惱しうおぼされて、御風などいひて、御湯茹などし、葉きこしめして過させ給へどに、まめやかに苦しうせさせ給へば、みやも里に出でさせ給ぬ。(前掲書上、三九ページ)

師輔の「風」であり、この場合も結局そのまま死に至る。この部分の大系本補注には「湯茹」の詳しい解説がみられる。

湯茹は湯治。簡便な保温療法で、その延長が温泉療法。日本文学全書本榮花物語の頭注に「この詞、この物語の中数多所見えたり、意は湯もて身をあたゝむる事なり、風ひかんとするとき今もしかする事世のならはしなりかし、風の事にいへるは野府記八巻に風病之所、致者、先服<sub>ニ</sub>補皮、云々又加<sub>ニ</sub>湯治<sub>ニ</sub>云々と見ゆ云々」(これは小右記、万寿四年十月廿八日条を指す)とあり、小山田与清『松屋筆記』(卷十三、風を治るに湯治すること)に「字、鏡に燥、以<sub>ニ</sub>菜入<sub>ニ</sub>湯、奈由<sub>ニ</sub>豆(なゆで)ともありて、由豆は湯に入ることなり」とある。

この補注には「風」についての考察も詳しく、十三ヶ所の風の記事のうち大部分は死亡の転帰をとっているから、今日の単なる風邪より広く、重症のものを含むとしておられるのは従うべきであろう。

なお「風」の実体については各説ありて定めがたいので、ここでは触れない。

例3 (『茶花物語巻第十二、たまのむらぎく』かゝる程に、如何しけん、大将殿日頃御心地いと悩しうおぼさる。御風などにやとて、御湯茹でせさせ給ひ、朴きこしめし「御読経の僧ども番かゝず仕うまつるべく」など宣はせ、明尊阿闍梨夜ごとに夜居仕うまつりなどするに、御心地さらにおたらせ給さまならず、いとゞ重らせ給ふ。(前掲書上、三六七ページ)

頼通の病の場面。長和四年十二月のこの病の折には、結局具平親王の事件に関連した物の怪のしわざということが明らかとなつてめでたく平癒した、という記述がのちに続く。この例も「風など」の治療法としての「湯茹で」である。

例4 (『茶花物語巻第三十、つるのはやし』……又この程にあさましうあはれなりつる事は、侍従大納言の朔日よりあやしう例ならぬ、風にやとてほを参り、湯茹などして心み給けれど、いと苦しうのみおぼされければ「いかなるにか」とおぼし、殿々内もよろづに御祈も騒ぎけるに、四日の夜さり、殿の御前の終らせ給し折にこそうせ給にけれ。(前掲書下、三三二～三三三ページ)侍従大納言行成の死を叙した部分。なおこの「ほを参り」というのは、他の用例(例3など)から見ても朴を浴湯に入れるのではなく、朴を煎じて飲用することをいう。朴は風邪の折の妙薬とされている。

例5 (『狭衣物語三』殿には、ゆゝしきまで、恋聞えさせ給ひけるに、参り給ひたれば、見つけさせ給へる嬉しさの限りなきにも、とゞめ難げなる涙の気色も、見たてまつらせ給には、「戯

れにも、我思ひよる筋は、あさましき事かな」と、思し知られつゝ、雪げに御足も腫れて、悩ましく思さるれば、茹でつゝろひなどして歩きなどもし給はず。(『岩波日本古典文学大系本二二〇ページ。古典文庫刊蓮空本も同じ。なお朝日日本古典全書本下、一〇ページには「雪げに」以下は「雪やけに足も腫れて悩ましう思さるればゆでつゝろひなどして、歩きなどもし給はず。」と少異がある。古典文庫刊宝玲本「さころも三、十一、十二ページは「ゆきけに御あしもはれてなやましくおぼさるればゆでつゝろひなどしてあるきなどもし給はず。」)

主人公の狭衣が、飛鳥井姫君の兄の僧にいに、氷の閉ざす粉河寺を訪れ、父堀河大殿のもとに帰つて来た場面。雪のために足を痛めて「ゆでつゝろふ」のである。古典全書本の「雪やけ」は霜やけの類の語か。

例6 (『とりかへばや上』「ことゝしかるべきにもはべらねど、乱れがはしうおこりたちはべりぬる時、はた動きなどせられぬくせにて、ゆで、などしはべるとて、こもりぬはべるぞ。……」(鈴木弘道氏「とりかへばや物語の研究校注篇解題篇」四〇ページ)宰相が、病氣見舞に来た女中納言に対して謝意を述べることば。「おこり」のために「ゆで」などするという。頭注に「入浴などしますので」とあるが、やはり病の治療のためという目的を持ったものであろう。

例7 (『とりかへばや上』おとなしき人は、台盤所の方にて、とかうことおきて、大上の祿どもなど見たまふことどもりありて、わが御方におはしなどして、子持の御方、なか／＼こよひゆで、などして、人ずくなにて臥したまへり。(同、七四ページ)

産後七日目の四の君の様子。本文底本（伊達家旧蔵本）「ゆしてなど」を岡田真氏旧蔵本によって「ゆでなど」と改めてある。今井源衛氏による書陵部蔵御所本「とりかへばや」の複製を見る限りでは、「ゆゝて」（「ゆ」のおどり字）と読める字体である。伊達家本はこれを「ゆして」にまぎれやすい字体で記したものであり、やはり「ゆゝて」とみてよいと考えられる。即ち「湯如<sup>ゆ</sup>でなどして」である。ここは病気ではなく、出産の回復を目的とした唯一の例である。頭注に「湯で身体をあたためる」とあるが、やはりある意味で産後という病的状態を改めるための手段であろう。

例8 「統詞花和歌集雑上」大齋院御足なやませ給ふをすぎのゆにてゆでさせ給ふべき由申ければ、ゆでさせ給へどしるしも見えざりければ

足曳の病もやまず見ゆるかなしるしの杉とたれかいひけむ  
返し 齋院

しるしありとすぎにし方はきくものは我がこのみわのやまめなるべし（国歌大系第九卷所収。七五三）

統詞花集は藤原清輔の私撰集で成立は永万元年（一一六五）以後とされている（和歌文学大辞典）。これも「足」をゆでたのであるが、「杉の湯」とあるように湯の中に杉の葉を入れたものとみられる。その縁で古今集雑下の「我が庵は三輪の山本こひしくはとぶらひ来ませ杉立てる門」をからませた贈答歌である。国歌大系本の頭注に「この歌は『杉』といふ湯であった故杉に慣用の『しるし』を言ひかけて居る」とされるのは「杉の湯」という固有名詞と解されたのであろうか。なお大齋院は選子内親王、宰相はその女房であらうとすれば、詞書の成立は永万元年よりもっと早く寛和元年（九八五）か

ら長和四年（一一一五）のころと考えることも可能である。

例9 「重之集上二六七」あるやむことなきところのあたりにて、かせにわつらふに、ゆゝてするに、かたひらこへは、いみしきしなのゝふるきかたひらをおこせたり、かへすとて

かへしやるみちにほとふるから衣こゝの物そと人もこそみれ

（私歌集大成中古一、六七二ページ。西本願寺本）

「かせ」のための「湯如<sup>ゆ</sup>で」である。ここでは特に「かたびら」を「湯如<sup>ゆ</sup>で」のために乞うたところ古いかたびらをよこしたと読める文脈である点が具体的な描写として注目される。今日の「浴衣（ゆかたびら）」であろう。栄花物語巻第十九、玉の飾の巻にも「かぎりと見たるにぞ急ぎ上らせ給て、御湯帷子<sup>ゆかた</sup>ながらおはしましたるに、御けしきの例ならずおはしませば」（前掲書下三〇七ページ）とみえる。なお重之は、およそ一〇〇〇年頃に没した歌人であるが、重之集自体の成立ははっきりしていない。

以上九例は和文脈の「ゆづ（ゆゆで）」であったが、以下今昔物語などにみえるものをあげてみる。

例10ノ1、（今昔物語巻第一九、信濃ノ國ノ王藤観音出家語第十

一）今ハ昔、信乃ノ國、 ノ郡ニ ノ湯ト云フ所有リ。

諸ノ人、菓湯也トテ来テ浴ル所ノ湯也。而ル間、其ノ里ニ有

ル人、夢ニ見ル様「人來テ告テ云ク、明日ノ午時ニ観音來リ

給ヒテ此ノ湯ヲ浴ミ可給シ、必ズ人結縁シ可来シ」ト……男

此レヲ聞テ云ク「己ハ此ノ一兩日ガ前ニ狩ヲシテ馬ヨリ落テ、

左ノ方ノ腋ヲ突キ折タレバ、其ヲ筋ガ為ニ来タルヲ、此ク礼ミ

合給コソ恠シト思ユレ」ナド云テ、（前掲書四、八七〜八八ペ

ージ）

例10ノ2〔宇治拾遺物語八九、信濃国筑摩湯に観音沐浴事卷六ノ七〕……「おのれさついでころ狩をして、馬よりおちて、右のかいなをうち折りたれば、それをゆでんとて、まうできたる也」〔前掲書二〇七〜二〇八ページ〕

例10ノ3〔古本説話集、信濃国筑摩湯観音為人沐浴給事 第六十九〕……「をのれは、さいつころ、かりをして、むまよりおちて、みぎのかひなをうちをりたれば、それゆでむとて、まうできたる也」〔岩波文庫本一五九ページ〕

今昔物語、宇治拾遺物語、古本説話集に見える類似の説話である。大筋は、信濃の国の筑摩湯の人が、観音が湯浴に来るといふ夢を見て、待っているうちに、予言と全く同じ風体をした男が来たので、これこそ観音と礼拝したところ、男は驚くが結局仏縁に感じて出家したという話である。「左(右)のかひな」を骨折したために治療に来た、という描写で、ここでは薬湯(温泉)である点が注目に値する。

例11〔今昔物語卷第二十、震旦ノ天狗智羅永寿、渡此朝語第二〕「宣フ事尤モ理也。然ハ有レドモ、大國ノ天狗ニ在シケレバ、小國ノ人ヲバ、心ニ任テ接ジ給ヒテムト思テ、教ヘ申シツル也。其二、此ク腰ヲ折リ給ヒヌルガ糸惜キ事」ト云テ、北山ノ鶴ノ原ト云所ニ将行テナム、其ノ腰ヲ茹愈シテゾ、震旦ニハ返シ遣ケル。其ノ茹ケル時ニ、京ニ有ケル下衆、北山ニ木伐ニ行テ返ケルニ、鶴ノ原ヲ通ケレバ、湯屋ニ煙ノ立ケレバ、湯涌ナメリ。寄テ浴テ行カムト思テ、木ヲバ湯屋ノ外ニ置テ、入テ見バ、老タル法師二人、湯ニ下テ浴ム。一人ノ僧ハ腰ニ湯ヲ沃サセテ臥タリ。……〔前掲書四、一四五〜一四九ページ〕

震旦と本朝の天狗が力競べをする話。震旦の天狗が老法師の姿に化して人をたぶらかさんとするが、かえって横川座主の供をする童子に怪しまれて「腰ヲ踏ミ被折テ」しまう。治療のため鶴の原の湯で「茹愈シ」たが、そこには天狗の異臭が漂っていた、という筋である。頭注によると「北山ノ鶴ノ原ト云々」以下は、真言伝には房ニカキキテ行テ湯治シテナン唐シヘ返シケル。此事ハ此國ノ天狗ノ人に付テ語り伝ヘタル事也

とある由であり、これに従えば「ゆでいやし云々」は真言伝では「湯治」といいかえられる可能性があることになろう。

例12〔今昔物語卷第二十四、行典薬療治病女語 第七〕其後女ノ云ク、「然テ次ニハ何ガ可治。醫師「只意以湯ヲ以テ可茹キ也。今ハ其ヨリ外ノ治不可有」ト云テ、返シ遣テケリ。〔前掲書四、二八六〜二八七ページ〕

五十歳ほどの腫れた女が、医師によって「寸白(条虫)」によるものと診断され、虫を引出して「柱ニ七尋許巻」きとられたのちもと通りに治った。引用したのはそのあとの医師のことばである。「葱苡湯」は頭注によるとハトムギの煎汁であるが、これは服用したのではなく外科的に用いたのであろう。引用部分の前に

抜クニ随テ、白キ麦ノ様ナル物差出タリ。其ヲ取テ引ケバ、綿々ト延レバ長ク出来ヌ。

とあるのは、禅智内供の話と考え合せると何らかの共通なイメージがあるようである。ちなみに今昔物語の「鼻」の描写には何らかの寓意があるうかと思うが、ここでは触れない。

例13〔今昔物語卷第二十八、大蔵ノ大夫紀ノ助延ガ郎等、府ヲ被炸電語、第三十三〕而ル間、一人ノ男有テ、亀ノ頸ヲフツト

切ツレバ、亀ノ躰ハ落ヌ。頸ハ昨フ乍ラ留マリタルヲ、物ニ押充テ、亀ノ口脇ヨリ刀ヲ入レテ、頤ヲ破テ、其ノ後ニ亀ノ頤ヲ引放チツレバ、錐ノ崎ノ様ナル亀ノ齒共、昨ヒ被連ニケレバ、其レヲ和ラ樽テ、搦抜キニ抜ク時ニ、上下ノ脣ヨリ黒血走ル事无限シ。走り畢ツレバ、其ノ後ニ蓮ノ葉ヲ煮テ、其レヲ以テ茹ケレバ、大キニ腫ニケリ。其ノ後膿返ツ、久クナム病ケル。(前掲書、五、一〇八〜九ページ)

亀にたわむれたところ、唇をくいつかれた郎等の話。「蓮ノ葉ヲ煮テ」ゆでるのに用いている。  
以上の十三の例が現在のところ私の見出し得た食物以外の「ゆづ」の用法のすべてであるが、いずれも身体の一部をゆでる事によって治療したことを意味する。これを表にまとめてみれば次のようなことになろう。

例	語	出典	病状	備考
例1	ゆづ	栄花	風	
例2	ゆゆで	栄花	風	
例3	ゆゆで	栄花	風	
例4	ゆゆで	栄花	風	
例5	ゆでつくろふ	狭衣	足の腫れ	
例6	ゆづ	とりかへばや	おこり	
例7	ゆづ (ゆゆで)	とりかへばや	産後	
例8	ゆづ	続詞花	足の病	(杉の湯)
例9	ゆゆで	重之集	風	
例10	ゆづ	今昔等	腕骨折	温泉

例11	ゆでいやす	今昔	腰骨折	
例12	ゆづ	今昔	条虫	薑苡湯
例13	ゆづ	今昔	唇外傷	蓮の葉
禅智内供ゆづ		今昔等	長鼻	ゆでて更に ふむ

禅智内供の場合も、このように見て来ると、「ゆづ」という言葉そのものは今昔物語の文脈の中ではさほど特殊なものではなく、むしろ極めて自然に用いられた語であると言ひ得るであらう。

更に、「鼻」では、「ゆでる」目的は、「長い鼻を短くする」ためのものとされている。実際以上に短く見せる方法を鏡に向つて工夫したり、一人でも自分のような鼻のある人間を見つけようと物色したり、乾燥の毎日である。

内供がかう云ふ消極的な苦心をしながらも一方では又、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざこゝに云ふ迄もない。内供はこの方面でも、殆出来るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。尿の尿を鼻へなすって見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さを、ぶらりと唇の上におら下げてるのである。

そして「もと震旦から渡つて来た男で、当時は長楽寺の供僧になつてゐた」知己の医者から教つた方法というのが「茹で、その鼻を人に踏ませると云ふ、極めて簡単なものであった」ということになつた。

しかし、今昔物語では、もちろん最終的には鼻を小さくするためであつたにせよ、直接には腫れて痒いので、ゆでた、と読めるよう

な文脈である。即ち先に引いたように、「色ハ赤ク紫色ニシテ、大柑子ノ皮ノ穢ニシテ、ツブ立テゾフクレタリケル。其レガ極ク痒カリケル事无限シ。然レバ、提ニ湯ヲ：」というわけだ。ゆでると「紫色」になる、それをふませて又ゆでると鼻は小さくなる、二三日たつと「痒リテフクレノヒテ、本ノ如クニ腫テ、大キニ成ヌ」といった筋合いのものであり、単に大きいのではなく、病的に赤く腫れて痒みのあるものとしてとらえる。このことは狭衣の場合、寸白の女の場合同も共通する。

芥川が『もう大分茹った時分でござらう』内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだらうと思つたからである」と記述していることから考えても作者はこの「茹でる」という語をかなり意識し、興じて、わざわざその「ずれ」のおもしろさを巧みに作品の中に持ちこんだと推定するゆえんである。

ただし、作者が、榮花物語以下の用法を知っていたかどうかは自ずと又別の問題であらう。先に述べたように、この意味の「ゆづ」は用例がすくない上に、時代的にも平安末期に局限しているようである。古い辞書類や、江戸時代の例がないことから見ても、やはり食物を茹でる意が本来であつて、治病關係に用いるのは日常語的な転義であると思つてよいと思われる。

### 三

ところでこの「ゆづ」とは具体的にどのような方法を指すのであらうか。まず前述のごとく、「入浴してからだを温める」、即ち湯治などとはほぼ同様な意について考えてみよう。例としては、「例9」重之集の「かたびら」を用いたという記述が参考となる。

又、「例10」の今昔の例では、  
此ノ湯ヲ浴ミ可給シ

と夢に見て、実際に来た男は

其ヲ茹ガ為ニ

といつているし、宇治拾遺の題には

観音沐浴事

古本説話集の題は

為人令沐浴事

とある。更に温泉における「ゆゆで」であつた。「例9」の天狗の話も

湯ニ下テ浴ム。……湯ヲ沃サセテ臥タリ。

とあり、更に真言伝では「湯治シテ」と見えていることは、前に述べた通りである。従つて「浴ム」「沐浴」「沐」「湯治」とも言いかえることは可能なのであつて、その限りでは入浴に近い。

しかし、治療にのみ用いたこと、用例のすくないこと、禪智内供の話などを考え合せると、どうももう少し限定して考えた方が良さそうである。現に、この話の発端の部分には禪智内供の池尾の僧坊のにぎわいを叙したのちに、

湯屋ニハ寺ノ僧共、湯不湧サヌ日无クシテ、浴嚙ケレバ、眺ハシク見ユ。

とあつて、しかる後に「提ニ湯ヲ熱ク涌シテ……茹ル」という話に移行する。即ち潔める、あるいは温めるための「浴ム」とは区別して用いられているのである。しかも、おだやかな「入浴、温浴」と異つて、

火ノ氣ニ面ノ熱ク炮ラルレバ、其ノ折敷ノ穴ニ、鼻ヲ指シ通シ

テ

とあることからすると、火の上に提をのせ熱湯をたぎらせ、その「湯ニ指入レテサラメ」いたこととなり、温度は入浴どころではなかつた筈である。宇治拾遺の

火のほの顔にあたらぬやうにして、

にしても同様である。勿論これらには説話特有の誇張表現があり、そのまゝ事実とは受け取りかねるもの、これは「熱い湯を用いて心理的肉体的にショックを与える」という点では「ゆづ」という治療のかなり本質的な要素をついているのではなからうか。

このように見ると、足の腫れや、腕・腰の骨折、外傷などは、入浴湯治よりもずっと熱い湯に患部をひたしたり注ぎかけたりすることによって治したとも言えそうである。「風」の場合には、右のことを考えてみると、富士川游氏の「日本医学史」、第八章、浴法の項に、

脚湯(坐浴)モ亦古クヨリ行ハレシコトハ本草衍義ニ熱湯助陽氣、行経絡、患風冷氣痺之人、多以湯洗脚至膝上、厚覆使汗出周身、然亦别有藥、亦終飯陽氣、而行爾、四時暴泄利、四肢冷、脐腹疼、深坐湯中、侵至腹上、頻頻作之トアリ。統詞花集ニモ「大齋院御足なやませ給ふをすぎの湯にてゆでさせ給ふべき由申ければ、ゆでさせ給へどしるしも見えざりけり」トアルニテ知ラルベシ。

とある「脚湯」の類の部分浴があるいはこれに相当するのではないであろうか。短い時間脚を膝上まで熱い湯にひたすこの方法は、今日でも変動の調節に用いらる。富士川氏はまた、

我が邦ニアリテモ、浴法ハ古クヨリ行ハレ、榮花物語玉村菊巻「大将殿日頃御心地なやましくおぼさる、御風にやとて御ゆゝ

でせさせ給ふ」トモ、近世ニ至リ大和本草ニ「傷食・食滯・瀉瀉・腹痛等ノ症ニ温浴ヲ用フルトキハ氣廻リテ早く愈ユ、藥ヲ用フルニ勝レリ」等ノ説モアリテ、浴法ハ再び興リ、殊ニ藥浴法ハ温泉ト併ビテ盛行ハルルニイタレリ。

と、榮花物語の「ゆゆで」を入浴法とし、脚湯とは區別しておられる。しかし私は「ゆゆで」も脚湯に近い方法ではないかと考えたいのである。ただし、榮花物語その他に、足に患部がある以外に脚を云々した記事がないし、又必ずしも脚湯と断定はしにくいのであるが、少くとも「入浴」ではなくて、「身体の一部をかなり熱い湯に短時間浸すこと」によって心理的肉体的に激しい刺激を与える治療法」といったような方法であろうと推定したい。服部敏良氏の「平安時代医学の研究」中の「平安時代文化の医学的検討」の項には寺院に於いても諸種の設備を整え民衆の利便を図ったが、就中有名なものに浴室があった。寺院の浴室は今日の大衆風呂とも称すべきもので、僧侶ほか一般庶民の入浴を許していた。

と指摘されており、禅智内供の池の尾の寺の浴室はこれに当らう。同書「風の病」の項には榮花物語の湯ゆでの記述や、諸書の「風の病」の記事を豊富に引き、その実態を詳しく考察されたのちに、結論として

即ち当時の風の病の治療法としては、或は朴を煎じてのみ、あるいは蕤を服し、湯治を行い、或は冷水を灌頂する等の方法が行われた。

と記しておられるところを見ると「湯ゆで」即ち「湯治」と解しておられるのであろう。又、温泉療法の歴史については「明治前日本医学史三、日本治療学史」(西川義方氏)中の「温泉療法史」の項

(四七〇ページ)に詳しい。

以上のように、「浴ム」「沐浴」などと大きく言いかえることは可能ではあるものの、「ゆづ」とはその中の一つの、あくまでも治療を目的とした方法というように見ておきたい。

このように考えることは決して今昔物語の内供の記事を平板にしたりはしない。むしろその茹で方の活写は他の例とは全く異ったおもしろさを表現しているし、何よりもものは人間の「鼻」なのである。それをあたかも食物であるかのように「提」に入れて「ゆでる」とは何とも苛烈で愉快な表現ではないか。

この微妙な原文のあやを、芥川は敏感に受けとめて「鼻」に生かしているとみてよからう。

なお「湯屋」は和名抄に「由夜」、類聚名義抄に「ユヤ」と見え、更級日記にも「ゆやにおりて御堂にのぼる人声もせず」などに見える語である。又源氏物語などには「ゆどの」の語も頻出する。これらは庶民階級の如き「むし風呂」ではなくて湯を身体にあびせるもので今日の浴法にやや近いものと言われている。

又、江戸時代の和歌系の随筆書の筆者達にとっても、この語は大変気になる存在だったようである。まず、山城岡崎の歌僧釈慈延は、「隣女略言」(享和二)において

栄花物語月宴に、九条殿なやましうおぼされて、御かせなどいひて、おほむゆゝでなどして、くすりきこしめして云々。此風のこゝちにゆゝするといへるは、いかさまにするにか。医法にある事にや尋ぬべし。源氏物語などにはなき詞なり。狭衣に、雪やけにあしもはれて、なやましうおぼさるれば、ゆでつくろひなどして、あるきなどもし給はずと云々。これは足の痛

に湯ユですること、今もする事なり。杉をせんじてする事もあるべし。(日本随筆大成二ノ七、三八〇—二ページ)

と疑問を述べた上で統詞文集雑上(前掲例8)の用例をあげる。次に富士谷御杖の「北辺随筆」(今文政二)も狭衣(例5)をあげ、

湯して足をあたたむるを「ゆでつくるひ」といへるも、今は菜などをこそさいふなれ。菜をゆづといふは、今のみにあらず、ふるくいひける事なり。催馬菜、大芹「おほせりは、くこのさたもの、小芹こそ、ゆで、もうまし云々」、とよめり。されば此狭衣のは、もと菜をゆづといふより、転用せるなるべし。云々(日本随筆大成一ノ八、七五ページ)

と「ゆづ」の語義の転用を推定する。小山田与清の「松屋筆記」には、先の古典文学大系本頭注の引用部分の他に、

栄花月の宴に御風などいひて候湯ゆでなどして云々もとの掣に御風にやとてゆでさせ給ひてのぼらせ給ふ云々同衣の珠には風などいひて有馬へと出立給へどもあり風を治るに湯治することなり。云々(図書刊行会本第一、一一九ページ)

と風の治療という観点から「湯治」の意と考える。

これら三つの随筆に相互関係はないようであるが、いずれにも共通するのは、和文脈のみの例であって今昔物語への看取がないために疑問のまゝ終ってしまったことである。しかしこの当時すでに「ゆづ」「ゆゆで」が疑問をふくむ注目すべきことではあったことがわかっておもしろい。現代の辞書類はこうした記述を受けついでるのであろう。

なお「鼻」の中では「ゆでる」の語が先に見たように三ヶ所に用いられているが、この部分を二種類の英訳本によって見ると、次の

かうにいずれも “boil” があべつられていふ (大妻女子大学英文科教  
授新井明博士にゆゑ)。

1. Akutagawa, Ryunosuke

Tales Grotesque and Curious,

Tr. Glenn W. Shaw. Tokyo: Hokuseido, 1938.

(First ed, 1930)

“The Nose”

The method was the very simple one of just boiling his  
nose in hot water and letting someone trample on it.

“It must be boiled now, I think.”

“If you boil it once more, it'll be all right, I think.”

2. Akutagawa, Ryunosuke

Japanese Short Stories. Tr. Takashi Kojima.

New York: Liveright Press, 1961.

“The Nose”

The formula was a simple one: first to boil the nose in  
hot water, and then to let another trample on it and  
torment it.

“I suppose it must be sufficiently boiled by now”

“Now, your Reverence, we have only to boil it once  
more, and it'll be all right.”

この外英訳本としては福田島氏の “The Nose of Naigu Zenchi”  
(英語青年昭和二十七年七月号) があるが、省訳のため「ゆでる」に相  
当する部分は訳出されていない。新井氏によると英文脈の中にあっ  
ても “boil” はきわめて奇異かつユーモラスな表現であるとのこと  
である。

#### 四

さて、この「鼻」については、さまざまの評論、註釈が行われて  
いるが、今昔物語等との関連にしぼってみれば、吉田精二氏の「鼻  
注解」(解説と鑑賞昭和四十一年十一月号、十二月号、四十二年一  
月号)と、馬淵和夫氏の「今昔物語集と芥川龍之介」(四十一年十  
一月号)と題する論が最も精細である。

私の問題とした部分について吉田氏は

そうして最後にこころみた新しい治療法がどうやら成功する。  
この療法も珍妙をきわめたものであるが、これは今昔、あるいは  
宇治拾遺にあるものを、大体そのまま適用したものであつ  
て、芥川のでからではない。また原文の

鼻ノ下ニ物ヲカヒテ、人ヲ以テ踏スレバ、黒クツブ立タル穴  
毎ニ、煙ノ様ナル物出ツ、其ヲ賣テ踏メバ、白キ小虫ノ穴毎  
ニ指出タルヲ鑑ヲ以テ抜ケバ、四分許ノ白キ虫ヲ穴毎ヨリゾ  
抜ケル。其ノ跡ハ穴ニテ開テナム見エケル。

というあたりは、素朴で単純ながら、力強く、淡々と叙しながら  
奇怪幻妖なおもむきがあつて、芥川の巧緻な現代的表現も及  
ばないほどの迫真性がある。そぞろに今昔物語作者の筆力の妙  
を思わせるすぐれたパッセージである。

と評しておられる。

馬淵和夫氏は、「さてこの今昔のはなしを、芥川がどうよんでい  
たかつまり芥川の創作の部分ははずして、原文をどのくらい正確に  
よんでいたか、という点をとりあげてみよう」というわけで、

1、原文では真言宗であるらしいのに、芥川は内供を観音經をよ  
むことにしているから天台の僧という想定をした。2、「湯は寺の  
湯屋で、毎日沸かしてゐる」云々は蒸風呂を想定しているのであ  
うからほぼ正確である。3、「湯氣に吹かれて顔を火傷する」とい  
うのは芥川も原文の意味をくみとるのにこまったらしい。おかしいと  
おもい乍ら書いたのかも知れない。4、「法慳貪」ということばは  
辞書にはない。「慳貪」はあるから恐らく芥川の造語であろう、など  
の問題点をあげられる。

最後に、一体芥川はどんな「今昔物語集のテキストをよんでいた  
か」という問題に挑戦される。まず「藪の中」や「偷盜」に出てく  
る「多裏丸」という名前についてみれば「国書刊行会本丹鶴叢書今  
昔物語」のみにあり、国史大系・攷証今昔物語集には「多裏丸」と  
ある。丹鶴叢書の版本は、どちらともよめる字体である。ところが、  
一方「禅智内供」という名前は「国書刊行会本」では題も本文  
も「禅珍」である。むしろ国史大系、攷証今昔物語集の本文(題名  
は禅珍)の人名である。というような点から、鼻の成立した大正四  
年九月以前の発刊になる今昔は丹鶴叢書系以外ほとんどなく「多裏  
丸」「禅智」をからみ合せる限り、何をテキストとしたかわからな  
い矛盾をはらむことになる。といった詳しい考証をしておられる。

この何をテキストとしたか、ということは馬淵氏の言われるよう  
に確定はできないのであり、吉田氏もこれに言及して「未定」とし

ておられるが、私の問題とした観点からもう一度考えてみよう。

まず、明治から芥川の没する昭和初年までに出版された活字本今  
昔物語のテキストをあげる。

1、「史籍集覽」近藤瓶城。明治三十四年六月。片仮名混り本。  
注はなくルビも殆どない。

2、「国史大系」第十六巻。経済雜誌社。明治三十四年十月。片  
仮名混り本。諸本による異同注記がある。

3、「丹鶴叢書」国書刊行会。上明治四十五年四月、下大正元年  
十二月。片仮名混り本。ルビなし。

4、「校註国文叢書」博文館刊。池辺義象。上大正四年七月、下大  
正四年八月。頭注あり。平仮名混り本。ルビ多し。

5、「攷証今昔物語集」芳賀矢一。上天竺震旦大正二年六月、中本  
朝部上(巻二十まで)大正三年八月、下本朝部下(巻廿一欠、  
廿二〜卅一まで)大正十年四月。片仮名の送り仮名のみ。注は  
他本の異同注記のみ。本文のあとに、宇治拾遺などの説話や仏  
典に見える、類似の話が全文列挙してある。

右のうち「5」については、ここで問題とする本朝部巻二十八は大  
正十年発行ということになるので、差し当って「1、2、3、4」  
のいずれかということになる(大正四年十二月「鼻」脱稿)。又  
「羅生門」の原典も巻二十九にあるから問題外である。因みに今昔  
の明治大正期における研究状況は、片寄正義氏の大著「今昔物語集  
の研究上」(昭和十八年)に「今昔物語研究史」と題して詳述されて  
いる。

結論から言うとも馬淵氏の

さてもしこのわたくしの推察(永井注、校注本をみているので

はないかという推定)があたっているとしたならば、芥川が「今昔」をよんだのは、大正四年八月二十八日よりあとということになる。ところが、これもまたぐあいのわるいことがある。

というのは、芥川は「羅生門」を発表したのは大正四年十一月であるが、これを脱稿したのは大正三年十二月ということである(吉田精一先生の御教示にする)。とすると、わたくしの推定は、あやまっている。すくなくも修正しなくてはならぬ。そこで、つぎの様な経過を考えてみる。まずかれは、ある「今昔」のテキストにより「羅生門」を着想して、大正三年十二月に脱稿した。ところがその後大正四年九月以降に「校註国文叢書」を入手したが、「羅生門」については加筆訂正したかどうかかわからないが、大正四年十一月に発表した「鼻」以後の作品については「校註国文叢書」を参考にし、それより影響をうけた。

という御意見に従いたい。

馬淵氏が先の論文に挙げられた理由に、一、二をつけ加えさせていただけば、「校註本」の頭注(「茹づ」)に「湯にて煮るをいふ也」とあるのも、あるいは芥川の注意をこの語に向けさせる機となったかも知れない、という気がする。

もう一つ、昭和二年四月発刊の新潮社版日本文学講座第六卷所収「今昔物語鑑賞」(芥川龍之介)に引用の今昔物語の本文が、「校註本」にほとんど一致する、という事実がある。芥川の晩年に発表されたこの一文には、今昔物語本朝部の五話が、本文合計約一五〇〇字ほど引用されている。これを先の四本と照合してみると、漢字、仮名、ふりがなに至るまで、一三字を除いて「校註本」本文に全く一致する。又、天竺部の「三獸行菩薩過鬼焼語第十三」の約六〇字

分は、「校註本」には天竺部を収録していない為に他を探さなくてはならない。この部分のみは「攷証今昔物語集」によっているらしいことがやはり照合で確かめられる。つづいて「耳は高く」以下の言葉は同じ語を載せた『大唐西域記』や『法苑珠林』には発見できない。と芥川は記しているが、この二つの話は「経津異相卷四十七」とともに、攷証今昔物語の本文のあとにそのまま、附載されているものである。従って攷証今昔物語を見ている事はほぼまちがいはかるう。

以上の事実は昭和二年当時「校註本」を底本として引用したらしいということであって、大正初年に遡るものではないが、少くとも大正初年にこの本を読んだという可能性を増す例証となるう。又冒頭に引用した芥川の注記「宇治拾遺にもある」という認識は「校註本」の頭註によった以外には考えにくい。

このようなわけで「鼻」は「校註本」によったと推定したのであるが、ここで問題となるのはやはり「校註本」の発行時のことである。奥付による限り上大正四年七月、下同八月刊行ということになるうが、羅生門とは矛盾し、更に「羅生門」とほとんど同時に書きはじめたという「鼻」ともくい違ってしまう。

羅生門：大正三年十二月脱稿(吉田精一氏説) 大正四年十一月帝

国文学発表

鼻……………大正四年十二月脱稿(新思潮本文発表時の注記) 大正五

年二月新思潮発表

吉田精一氏は、「鼻」の「注解」で説明しておられるように、未定稿「あの頃の自分の事」の中の「半年ばかり前から悪くこたはった恋愛問題の影響で……」  
「羅生門」「鼻」を書いたとする芥川の言によ

って、これを大正三年初夏の恋愛から半年後——即ち十二月ごろと推定しておられるのであろう。この年時は大正四年二月二十八日の恒藤恭氏あての書簡にこの恋愛のことが書いてある事実をもとにしておられるのであろうから、動きそうもない。

なお森本修氏「芥川龍之介伝記論考」（昭和三十九年十二月）によると、

…「羅生門」と並行して書きかけて途中で止めていた「鼻」を十一月初旬からふたび書きはじめた（「鼻」は大正五年（一九一六）一月二十日に書き上った）云々…（永井注、全集の末尾に「大正五年一月」作とある）

ということになる。同氏の「新考芥川龍之介伝」（四十六年十一月）も同様である。

このテキストの問題について、つとに今昔物語の方面から論究されたのは長野營一氏である。同氏の「芥川龍之介の『王朝物語』その一」（立教大学研究報告第四号、昭和三十三年）を母胎とする「古典と近代作家——芥川龍之介——」（有朋堂、昭和四十二年）には、大正三年八月作、九月「新思潮」発表の「青年の死」から、大正十一年七月作、八月「表現」発表の「六の宮の姫君」に至る、いわゆる王朝物が、古典とのか、わりの上から精緻に追求されている。長野氏は「芥川が座右におきまたは参看したであろうと思われる今昔物語の刊本について考えておこう」（「青年と死」永井注、攷証今昔物語集によると推定される）とこの面についての詳しい考察を示されるが、後年芥川が「校註国文叢書」を手沢本としていたことの例証を示されるものの、やはり同書発刊以前の大正三年、四年のあたりのごく初期の作品については何をもととしたかについては特定されな

い。「鼻」については特に「禅智」「禅珍」の問題がからむので複雑になってしまふのである。

又、森本修氏も、今昔物語との関連を問題にしておられる。氏の「羅生門」（「芥川龍之介作品研究」八木書店、駒尺喜美氏編、昭和四十四年）には「では、芥川は当時ほとんど知られていなかった『今昔物語』をどのような刊本で読んだのであろうか」として、安田保雄氏の説（「芥川龍之介『羅生門』」（明治大正文学研究、第五輯、昭和二十六年）や、前記長野氏の説を紹介されつつ、結論としてはやはり「『国史大系』『史籍集覽』『丹鶴叢書』のいずれかによつたものとみられる」ということにならざるを得ない。ただしこれは「羅生門」についてのものであり、「羅生門」の成立年時には今なお明らかではない部分があるようであるから、「鼻」の成立と切りはなして考えれば、「鼻」は「校註本」を参看したとみる考えとも矛盾しないであろう。

いずれにせよ、以上のべたことは「鼻」のそれも一部分を問題とした上でのテキスト推定であり、限界があるので「羅生門」及び王朝物全体の視点から見たより詳しい検討が当然必要であらう。馬淵氏のいわれる「ある今昔物語」のテキストが見出される日を待つこと切なるものがある。

又、別の観点からすれば、「鼻」の成功は夏目漱石の激賞という事情があるにせよ、大正四年の夏に、「校註本」という今昔物語の平仮名絵入り頭注つきの本、という当時としてはポピュラーなテキストが発刊されていて、知識人の間に今昔物語に対する認識が多少芽生えていたといったような素地があるのかも知れない。又、そのような場合、芥川のことであるからこの一般的な「校註本」ではなく

て、やや専門的な他のテキストをすでに読んでいた、というような痕跡を残そうがために、人名その他種々さりげない工夫がこらされている、といったことも考えられぬことではない。

右のことから、芥川の初期の作品と今昔物語のテキストとの関係はおおよそ次のようにまとめられるであろう。

イ、「青年と死」大正三年八月作、大正三年九月号「新思潮」発表

今昔物語巻四（天竺部）による

テキスト「攷証今昔物語集」上、天竺震日部（大正二年六月）

ロ、「羅生門」大正三年十二月又は大正四年九月作、大正四年十一月号「帝國文学」発表

今昔物語巻二十四（本朝）、二十九（〃）、三十一（〃）による。

テキスト「史籍集覽」「国史大系」「丹鶴叢書」のいずれか。

ハ、「鼻」大正四年十二月又は大正五年一月作、大正五年二月第四号「新思潮」創刊号発表

今昔物語巻二十八（本朝）による

テキスト「校註国文叢書」（大正四年七月、八月）

これ以上の推定は控えるが、ここで確かなことは、「鼻」執筆の時点において、芥川の手許にあった今昔のテキストは「攷証今昔物語集」「校註国文叢書」および「史籍集覽、国史大系、丹鶴叢書」のいずれか、の最低三種、最高五種にも及んでいたらしい、という事実である。今昔物語に対する彼の本格的な態度を物語るものである。「鼻」につづき「芋粥」「偷盜」以下の今昔ものが数多執筆されるが、その根底にはこのような多種類のテキストの「目次」から「題」「本文」に及ぶ、作家としての鋭い眼が光っていたのである。

以上のように、平安後期～末期という限られた時期において、ごく日常的な平俗語として用いられたとおぼしい「治病の目的をもって温（熱）浴する」という意味の「ゆづ」が、芥川龍之介の「鼻」に何くわぬ顔でまぎれこんでいるという事実は、何を意味するのであるのか。その間には今昔物語という作品が介在するのであるが、今昔の言葉の豊かな生命力に驚くとともに、その生きた言葉のずれを巧みに衝いて軽妙に変型した、若い芥川の直感にも驚くのである。

未解決の問題も多い。大方の御教示を乞う次第である。（五十三  
年十月）

注1 今昔物語の入手しやすいテキストには現在朝日古典全書

本（長野嘗一氏校註）、小学館日本古典文学全集本（馬淵和夫氏・国東文麿氏・今野達氏校註）などがあり、それらの本文、頭註などを参考とした。

注2 総索引によって用例を見出せなかった作品は次のようなものである。（ゆづ・ゆゆで）万葉集、竹取物語、伊勢

物語、古今集、土佐日記、後撰集、蜻蛉日記、枕草子、源氏物語（二種）、紫式部日記、更級日記、大鏡、方丈記、徒然草、四条宮下野集、馬内侍集、曾根好忠集、詞花和歌集、千載集、極楽往生歌、明恵上人歌集、梁塵秘抄、後拾遺集、金葉集、鎌倉右大臣家集、新古今集、藤原定家全歌集、芭蕉紀行文、蕪村句集、閑吟集、無名草子、大和物語、宇津保物語、落窪物語、平中物語、篁物語、多武峯少将物語、浜松中納言物語、ねざめ物語、松浦宮

物語、唐物語、平家物語、閑居友、和泉式部日記、十六夜日記、うたゝね、海道記、東関紀行、おくのほそみち、きのふはけふの物語。

注3 この点については「四」馬淵和夫氏の論文の部分で言及する。

注4 「本草衍義」は、国会図書館支部上野図書館編、「本草関係図書目録」によると、宋の寇宗奭の著わしたもので、丹波元胤校。文政頃の刊本がある。

注5 野口晴哉氏「体運動の構造Ⅰ」五七ページなど。

注6 服部氏「平安貴族の病状診断」（吉川弘文館）六ページ以下にも同様の記述がある。

注7 吉田精一氏、近代文学注釈大系「芥川龍之介」所収「鼻」、稲垣達郎氏「歴史小説家としての芥川龍之介」（河出書房、「芥川龍之介研究」所収）などにもこの点についての言及がある。

注8 吉田氏「芥川龍之介」（七、初恋）にくわしい。

注9 この点については「三」で述べたように、入浴（行水）と見る考えもある。特に今昔物語巻六第四十などに見える「温室」は、古典文学大系本の頭注によると「奈良の大寺の資材帳には大抵温室院があり、月二回浴室を開いて僧を浴せしめ、その翌日に布薩を行なった」ということとであり、同巻十九「参河守大江定基出家語第二」の記事にも、この温室の功德の話が見え、「湯ヲ涌シテ大衆ニ浴セムトシテ」「サフメカシテ湯ヲ浴ム」等の描写が見える。なお入浴の歴史については武田勝蔵氏「風呂と